

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
小児がん拠点病院等及び成人診療科との連携による長期フォローアップ体制の
構築のための研究
分担研究報告書

「小児がん患者に対する内分泌診療の指針開発」

研究分担者 岡田 賢

研究要旨

小児がんの治癒率が高まるにつれ、その晩期障害の管理の重要性が認識されるようになった。内分泌障害は、半数以上の小児がん経験者（CCS）で認める代表的な晩期合併症である。その中で本年度は、造血幹細胞萎縮関連部分脂肪萎縮症に着目し、その実態解明に向けた取り組みを行った。

A. 研究目的

小児がんは、治療法の改善により 80%以上の患者で長期生存が期待できるようになった。一方、小児がん経験者（CCS）は様々な晩期合併症を持つことから、それらの生活の質は、必ずしも良いとは言い切れない。内分泌障害は約半数の CCS で認める代表的な晩期合併症である。本研究は、CCS における内分泌障害の実態を明らかとし、それに対する一定の指針を示すことを目的とする。本年度は、造血幹細胞萎縮関連部分脂肪萎縮症に着目し、その実態解明を目的とした。

B. 研究方法

日本小児内分泌学会の評議員を対象に、アンケート形式で造血幹細胞萎縮関連部分脂肪萎縮症の実態調査を行う。

C. 研究結果

日本小児内分泌学会の評議員 171 名を対象に調査を行い、113 名（66%）から回答を得た。うち 12 名が造血幹細胞萎縮関連部分萎縮症を疑う患者を診療しており、患者数は 33 症例把握された。これらの症例を対象に二次調査を予定しており、調査のための倫理審査に取り組んでいる。

D. 考察

今回の調査では、1) 造血幹細胞移植後で、現在寛解を維持している、2) 非肥満、3) 2 つ以上の代謝異常を有する（インスリン抵抗性、糖尿病、脂質異常症、脂肪肝）、の全てを満たす症例を対象に調査した。二次調査で得られた情報をもとに、造血幹細胞萎縮関連部分萎縮症の実態を明らかとし、その診断基準の策定に取り組む予定である。

E. 結論

造血幹細胞萎縮関連部分萎縮症に対する認知は乏しく、潜在的な未診断例が多数存在すると考えた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) Kinoshita Y, Yamasaki F, Taguchi A, Takayasu T, Yonezawa U, Tominaga A, Arita K, Okada S, Horie N, Sugiyama K. Influence of growth hormone therapy on germinoma survivors. Pituitary. 25(6): 854-860., 2022

2. 学会発表

- 1) 岡田 賢. 長時間作用型 GH の最近の知見. 第 95 回 日本内分泌学会. 2022/6/3. 大分. 口演 (シンポジウム)
- 2) 岡田 賢. 宿主免疫の異常による様々な病態. 第 55 回 日本内分泌学会 学術集会. 2022/11/1. 横浜. 口演 (教育セミナー)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし